

Stone Letter Project

2021 年度活動報告

本研究プロジェクトは、京都芸大の倉庫より発見された明治以降に印刷産業で使用されていた石版と、それらの石版をめぐる情報を記録し、後世に残していくアーカイブを作成することを目的としている。

2017年に、本研究のきっかけとなる340枚の石版がアトリエ1号棟の倉庫より発見された。石版は40年前に大学が今熊野から沓掛へ移転したときに運び込まれたままの状態では保管されており、日本専売公社京都印刷工場が印刷媒体としての役割を終えて廃棄することとなった石版を、学生が制作で使用するための材料として大学に譲渡されたものである。何枚かは版画専攻でリトグラフ用の材料として石の表面を研磨して使用していたが、様々な興味深い画像が製版されたままの石版について、研究協力者である「たばこと塩の博物館」学芸員・谷田有史氏に調査を依頼したところ、ほとんどがタバコのパッケージ印刷用の石版石であり、大蔵省専売局時代のものを中心に、昭和24(1949)年に日本専売公社が発足してから製造・販売されていたものも含まれていた。時代的には、「たばこ」が専売品となった明治37(1904)年7月1日以降、昭和43(1968)年4月頃まで、実際に印刷や校正用として使用されていた石版であるとの調査結果が得られた。日本専売公社が「廃棄物」として京都芸大に譲渡したとはいえ、50年近くの時間を経た現在では、いくつかの石版は資料的価値があり、本研究ではこれらの石版を教育的資料としてアーカイブし継承してゆきたいと考えている。産業としての役目を終えた石版を用いて再度印刷することは、時代と共に衰退する古典技法の継承だけでなく、表現の新しさを検証する側面を併せ持ち、石版画やパッケージデザインの理解と鑑賞を深めることができると考えている。

昨年から続く新型コロナウイルスの感染拡大により、集まった作業が制限されたことで、石版を倉庫から運び出して再分別する作業が5月から8月にずれ込んだ。研究協力者である名古屋芸術大学の片山浩氏、京都精華大学の衣川泰典氏、大阪芸術大学の坂井淳二氏、また版画専攻の非常勤講師の先生や学生10名、本学芸術学専攻の畑中英二先生、芸資研の佐藤知久先生と桐月沙樹氏に猛暑の中お手伝いいただき、倉庫から1枚約10kgある石版240枚を一つ一つ運び出して、全てを虫干しのようにピロティに広げた後、石版プレス機の設備がある新研究棟に運び入れた。石版そのもののアーカイブと同時に、2年後の移転先の新校舎の版画工房で全ての石版を保管する事が難しい事もあり、記録とともに石版の選別も今後進めていく予定である。

8月から本格的に研究作業を開始し、研究協力者の衣川氏と版画専攻の学生2名とで改版と製版と刷りの作業を分担。石版に残された画像を版画紙に刷った印刷物と、写真撮影した画像データでの記録を、現在も継続して行っている。タバコのパッケージを印刷するための石版は何版かに分版されており、一つの石版だけではパッケージの完成とはならない。産業の視点からは、分版されている石版を色版として重ねて刷る事でタバコのパッケージとしての完成を目指す。本研究では、分版を刷り重ねるパッケージ印刷の再現を目的としている訳ではない。発見された石版に残された画像の全てを印刷して記録することを目指し、同時に沓掛校舎の片隅にある倉庫の内容物を紙に刷る事で明らかにし、石版をめぐる情報や京都芸大の歴史そのものを、違う視点で記録してゆく事にもなると考えている。

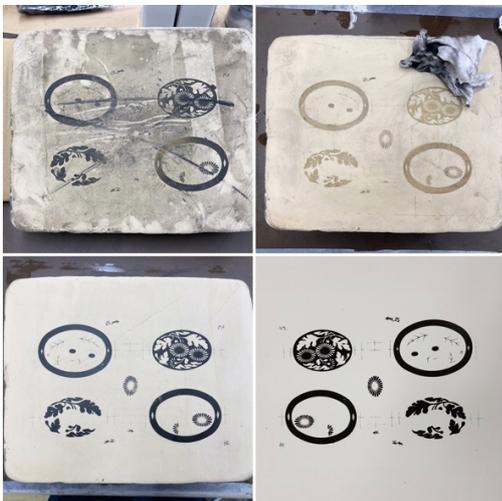
実際の作業を始めるまで、50年以上前の時を越えて発見された石版に残されている画像を元の状態のように紙に印刷ができることは困難であると予想していたが、石版一つ一つに残されている画像の硬化したインクを揮発性の高い有機溶剤で洗い、製版インクに置き換えて紙に刷る作業を繰り返していくなかで、予想以上の再現度で印刷できる事が分かり、石版の記憶媒体としての強度と性能に驚かされている。本研究によって、物質的な重量を伴う版に実際に触れることで知りえる体験と情報が、確実にあることを実感している。

現在では、石版画の技法を保存、継承している工房や大学も少ないなかで、あらためて「石」に着目した本研究では、「石」という物質としての媒体を見つめ直し、描く身体と「石」との関係性、そこで生じる情動について見つめ直すことも重要だと考えている。

石版画は描画からプレス機による刷りまで、その場で確認しながら制作者がコントロールできる。版材である石との格闘、描画のための道具や材料の吟味、インク、用紙への執着など、工程は結果や予定に合わせるというより、模索しながらの作業になる。そこには試行錯誤と偶然性や意外性がともない、感覚的作用と瞬時の判断、肉体を使った力技も求められ、それだけ版との身体的距離も近くなると考えられる。版画に至るプロセスには身体的な思考と行為が凝縮している。さらに刷る行為によって石から像が引き剥がされ、身体を離れ複製された新たなイメージの物質として現れる。思考する身体と、描き、刷る身体を強烈に拘束する「石」の存在がそうさせているのではないだろうか。過去の堆積物である「石」との身体的な関わりは、プロジェクトのタイトルにもある「手紙」のようなやりとりであり、石から紙に写しとられた像は過去からの「手紙」のようでもある。

来年度に予定されているギャラリー@KCUAでの展示では、「Stone Letter Project —石からの手紙」と題して、石版と石版に残されている図像を紙に刷った印刷物などの研究活動の成果を展示発表する予定である。プリンターでの出力が容易になった今日、あらためて版画と印刷について再考することは、印刷に至るプロセスに内包する制作者の思考と創造性に光を当てることでもある。現在のほとんどの印刷を担う平版オフセット印刷の起源である「石版」に着目することで、現在簡単に扱うことができるようになった写真や画像などの「メディア」は「物質」であるということを再認識する機会となるよう、本年度の活動成果を基盤としながら準備を進めている。

田中栄子（美術学部教授）



左：昭和初期のタバコのパッケージデザインが製版された石版の復刻作業工程（有機溶剤での洗浄→再製版→石版プレス機で印刷）

右：2021年8月2日、アトリエ1号棟前のピロティに倉庫から石版をならべ選別作業を行った